

ミロ・ラウ (IIPM) + CAMPO
『5つのやさしい小品』

Milo RAU (IIPM) + CAMPO
“Five Easy Pieces”

8.2 Fri – 4 Sun

愛知県芸術劇場 小ホール

Mini Theater, Aichi Prefectural Art Theater

情の時代
あいち
トリエンナーレ
2019
AICHI TRIENNALE 2019:
Taming Y'Our Passion



Photo: Phile Deprez

演出家、劇作家、映画監督、ジャーナリストとして活躍するミロ・ラウは、2007年より「政治殺人国際研究所 (IIPM)」を主宰。現実
に起きた凄惨な事件や歴史的事象を丹念に調べ上げ、舞台上に再
構成している。加害者・被害者双方の証言や、当時のメディアによ
る記録をもとに編まれる作品群は、一種の再現告発劇であると同
時に、明確に意図された政治性と美的強度によって、否が応にも
観客に思考と議論とを促す。

ベルギー・ゲントの劇場CAMPOからの招きを受け、オーディショ
ンで選出した地元の子供たちとともに創作した本作は、初演以来、
世界各地の演劇祭で多数の受賞を重ねる傑作であり、ラウの代表
作でもある。90年代にベルギー社会を震撼させた少女監禁殺害事
件をめくり、当時の報道や証言を踏まえ、7人の子供たちが「再演」
する舞台は、見るものの感情を激しく揺さぶる。社会の劇薬とし
ての演劇は、目を背けたくなるような出来事を、いかに現実の考察
へと繋げられるのだろうか。

Director, playwright, film director, and journalist, Milo Rau
has led the International Institute of Political Murder (IIPM)
since 2007. IIPM's approach is to carefully investigate
terrible incidents or historical events that occurred in
reality, and to reconstruct them on the stage. As well as
being a kind of accusatory re-enactment, their many works
—woven together from sources such as testimony from
both assailant and victim, and contemporary media and
records—have a clearly designed politicality and aesthetic
force, which compel the audience to consider and discuss
further.

The work to be staged for Aichi Triennale 2019—the
product of CAMPO (a theater in Ghent, Belgium) inviting Rau
to create a piece with locally auditioned and cast children—is
Rau's masterpiece, having won numerous awards at theater
festivals around the world since its original performance.
This work concerns a case of the confinement and murder
of young girls that rocked Belgian society in the 90s. The
performance, a re-enactment by seven children based on
contemporary reports and testimony violently shakes the
emotions of the audience. How can theater, as a potent
social medicine, prompt us to consider reality through a
horrific incident we would rather look away from?

ミロ・ラウ (IIPM)

1977年ベルン(スイス)生まれ

ベルリン(ドイツ)拠点

スイス人の演出家、作家。2018/19シーズンからNTGent劇場の芸術監督
に就任。パリにてピエール・ブルデュー、ツヴェタン・トドロフのもと社会
学を、ベルリンでドイツ語とロマンス語を、チューリッヒで文学を学ぶ。
2002年以降、50以上の演劇や映画、本を創作するなど、さまざまな活動
を行う。これまで、ベルリンのテアター・トレッフエン、アヴィニオンフェ
スティバル、ヴェネツィア・ビエンナーレ、ウィーン芸術週間、クンステン
フェスティバル・デザールなど主要な国際フェスティバルに参加し、世界
30カ国以上で作品発表を行っている。

Milo RAU (IIPM)

Born 1977 in Bern, Switzerland

Based in Berlin, Germany

The Swiss director and author Milo Rau, artistic director of the
NTGent beginning in the season 2018/19. Rau studied sociology,
German and Romance languages and literature in Paris, Berlin and
Zurich under Pierre Bourdieu and Tzvetan Todorov, among others.
Since 2002, he has put out over 50 plays, films, books and actions.
His productions have appeared at all of the major international
festivals, including the Berlin Theatertreffen, the Festival d'Avignon,
the Venice Biennale Teatro, the Wiener Festwochen and the
Brussels Kunstenfestivaldesarts, and have toured more than 30
countries worldwide.

主な公演・受賞歴

- 2017 オランダ演劇祭(オランダ)、セレクション
ベルギー演劇祭(ベルギー)、セレクション
トレフェンフェスティバル、ベルリン(ドイツ)、3-sat賞受賞
シアター・トゥデー(ドイツ) 最優秀作品賞、最優秀ドラマトゥルグ賞受賞
メスフェスティバル、サラエボ(ボスニアヘルツェゴビナ)、最優秀作品賞、
最優秀演出家賞、観客賞、批評家賞受賞
ウブ賞、イタリア、2016/17シーズン最優秀外国作品賞受賞
- 2016 演劇・ダンス評論家賞(ベルギー) 審査員特別賞受賞
[Five Easy Pieces(5つのやさしい小品)]クンステン・フェスティバル・デ
ザール、ブリュッセル(ベルギー)

Performances & Awards

- 2017 National Dutch Theatre Festival, the Netherlands, Final Selection
Het Theaterfestival, Belgium, Final Selection
Theatertreffen Festival 2017, Berlin, Germany, 3-sat award
Theater Heute, Germany, Award for Best production, Best
dramaturge
Mess Festival, Sarajevo, Bosnia and Herzegovina, Golden Laurel
Wreath for Best Performance, Golden Laurel Wreath for Best
Director, Audience Award for Best Performance, Critics Award
Premio Ubu, Italy, 2016/2017 Best foreign performance
- 2016 Theater and Dance Critics Award, Belgium, Special jury prize
Five Easy Pieces, KUNSTENFESTIVALDESARTS, Brussels, Belgium



Photo: Thomas Mueller



CAMPO

2008年設立

ベルギーのゲントを拠点とするアーツセンターCAMPO
は、演劇、ダンス、パフォーマンスから、フェスティバル、
地域食堂、討論にいたるまで多彩なプログラムを提供
する。舞台作品の制作を手がけ、世界中で公演を行う
ほか、アーティストの創造活動を全面的にサポート。
創作と発表のためCAMPO nieuwpoort、CAMPO
victoria、CAMPO bomaの3つの拠点をゲント市内に
構える。CAMPO bomaは、「思いのこもった物質主義」
(materialism with emotion)をモットーに活動する
作り手のコレクティブONBETAALBAARの拠点にもなっ
ている。

CAMPO

Founded in 2008

The Ghent based arts center CAMPO presents
a diverse program, ranging from theater, dance
and performance to festivals, neighborhood
kitchens and debates. They create performances
which tour internationally, and support artists
throughout their artistic process. CAMPO
has three sites in Ghent to work and present:
CAMPO nieuwpoort, CAMPO victoria and CAMPO
boma, where ONBETAALBAAR, a collective
of makers working around 'materialism with
emotion', is based.

『5つのやさしい小品』をめぐる

聞き手: シュテファン・ブレスク(ドラマトウルク)

——2016年に初演された本作は、国際的な評価も高く世界各地で上演されています。CAMPOはこれまでもティム・エツェルス、ゴブ・スクワッド、フィリップ・ケーヌと共同創作を行っていますが、ついにあなたに声がかかりました。子供たちと創作しようと思ったのはどんな理由からですか。

CAMPOは、普段から子供と創作をしていないアーティストに声をかけますが、その中でも私がいちばん変わった人選だったでしょう。私が主宰する「政治殺人国際研究所(IIPM-International Institute of Political Murder)」は、多くの国で、さまざまな活動をしてきました。出演者には、アマチュアもプロの俳優もいますし、大量殺人犯や過度に神経質なパフォーマーもいます。作品を発表する場所も、紛争地帯から国立劇場までさまざまです。古典的な戯曲を扱ったり、語りの演劇を作ったり、模擬裁判を立ち上げるなど、実に多様な制作を行ってきましたが、子供と一緒に創作したことはありませんでした。最終的には、これまでのほかの作品と同様に、まったく新しいことに挑戦するスリルへの期待が決定打になりました。

——「子供と道化は真実を語る」とよく言われますが、「子供の演劇」と聞くと、観客は、直球の舞台作品をイメージしがちです。

その通りです。調べてみると、子供と創作された作品は、「未来へのビジョン」、「大人の世界の不条理」、「本当の自分らしさ」、「詩的なおとぎ話の形式」など、いつも同じパターンを踏んでいる

* 白の行進 1996年10月20日、ブリュッセルで起きたベルギー史上最大のデモ行進。6人の少女が誘拐、監禁され、うち4人が殺害されたマルク・デュトルー事件をめぐる警察や司法の不手際に対して抗議し、約30万人が参加。司法制度の改正につながった。

ことに気づきました。不思議なライフストーリーを語り、音楽が引き立て役になっている、そんな純真無垢な作品ですね。しかし当然のことですが、私たちは全く違うことをやろうと思いました。大人たちは子供が観たいとは思わないものを舞台で観せたかったのです。つまり『5つのやさしい小品』は「子供の演劇」でありながら、リスクいかつ前代未聞、実現不可能と思われるような作品にする必要がありました。

——本作は、デュトルー事件を題材にしています。デュトルーは小児性愛者であり、悪魔的な存在としてベルギーで最も忌み嫌われた人物だと思います。あなたはリサーチから、デュトルーに関してどんなことを発見しましたか。舞台上で彼をどのように描こうと思いましたか。彼を舞台上に上げて、直接話をしてもらおうといったことも考えたのでしょうか。

2013年、ブリュッセルで『The Civil Wars (内戦)』という作品のリサーチを行っていましたが、そこで偶然、ベルギー人なら誰もが知る男としてデュトルーのことを知りました。私はその作品のリハーサル中、俳優たちにとってベルギーとは何か、自分がベルギー人だと実感するのはどんな時かと尋ねました。ベルギーは文化的に分断されており、フランスとドイツとの緩衝国として19世紀に成り立った国家です。歴史上、ベルギー全体がまとまるといったことは決してありませんでした。質問を受けた俳優たちも答えてくれましたが、デュトルー事件をきっかけに起こった1996年「白の行進」*でも、主な抗議デモはベルギー政府に対してでした。

——ベルギーの全国民が知る人物は、デュトルーぐらいなのでしょう。

残念ですが、そのようです。しかし、デュトルー事件を調べれば、調べるほど、ベルギー史との関連が見つかるのです。彼はベルギーの植民地であったコンゴで育ちましたが、事件を起こしたのはシャルルロワ周辺、現在は採鉱廃棄物の処理場になっている場所です。またデュトルー事件の裁判は、腐敗したエリート階級への社会的反乱を引き起こし、ベルギー国家を内側から崩壊させるほどでした。これは植民地を保有していた西洋列強が衰退していくアレゴリーとも見なせます。つまりデュトルーという人物を通じて、ベルギー史を語るができるのです。もちろんデュトルーに関して、ベルギー国民は自分の意見を持っています。子供たちでさえ、デュトルーについてなにかしら知っています。だからこそ彼が直接舞台に出て話す必要はないのです。『Breivik's Statement (ブレイビクの陳述)』(2014)でもそうですが、私たちの興味は殺人者自身、殺人者の精神性にはありません。デュトルーは社会に開いた穴であり、そこに重力が発生するのです。

——本作には8歳から13歳(编者注:初演時)の子供が出演します。どういった形で子供たちにアプローチしていったのでしょうか。子供にとって、怖すぎて手に負えない、衝撃的すぎる作品ではないのでしょうか。

創作チームには、アドバイザーが二人、児童心理学者が一人入っています。また出演する子供の保護者も、リハーサルには密に関わってもらっています。私たちは事件に最も近い形で巻き込まれた人にもコンタクトを取りましたが、いずれにせよ今回のプロダクションは、「恐れ」自体に関わるものではありません。極めて悲惨なデュトルー事件の背後に潜む、より大きな問題を私たちは扱っています。それは国家の衰退、国家的妄想、哀悼、事件後の憤りなどです。

本作は、ベルギーの旧植民地であるコンゴ独立の場面から始まり、事件に巻き込まれた犠牲者の葬儀の場面で終わります。観客の皆さんは、この

舞台の背景に、あらゆる幻想の消失を見るでしょう。ベルギー人であれば、ここ数十年間に経験したであろうこと、すなわち安全、信頼、自由や未来といったものが、すべて幻想であったことを知るのです。

この『5つのやさしい小品』には、ネガティブな意味合いがつきまっています。どの「小品」も短い独白を伴った再現シーンで構成され、それぞれの「小品」タイトルは、舞台上で行われることに対応しています。たとえばある「小品」では、殺人者になった息子に対して父親が抱く疑惑がテーマです。ほかの「小品」では、テーマはずばり暴行、虐待です。また別の「小品」では、人の感情の中でも最も深刻で暗い、子を亡くした親の悲しみを描きます。これらはすべて、事件の記録や関係者へのインタビューをもとに(自由に)構成されています。

——アリストテレスの言葉(『詩学』)にも人間は模倣する生き物であり、子供は模倣から学ぶ、とあります。本作において、子供たちは大人の世界で起きた残酷な行為に向き合わされますが、これにはどんな意味があるのでしょうか。

稽古を始めるにあたって、イングマール・ベルイマンの『ある結婚の風景』の数シーンを子供たちとやってみましたが、あれは特別な体験でした。子供たちは、ベルイマンが描く複雑に入り組んだ人間関係の中で、事実関係として何が起きているかを頭で理解しながらも、実際の感情、心の奥に潜む疑惑の念などは把握できないままに演技をしていました。そこには極めて自然なもの、日常生活においてこんな形では存在し得ないような露骨さがありました。演出家である私は、それをととても魅力的だと感じたのです。人生経験や俳優としての経験が主題であるにも関わらず、そうした経験が無い未熟な俳優と共に、そのシーンをどのように立ち上げられるのか。走り回ったり、ゲームにしか興味がないチームで、クリエイションへの集中力や精度をどのように上げることができるのか。こうした事情もあり、本作のタイトルは、ピアノの教則本にもありますが、規則正しく学ぶプロセスを示す『5つのやさしい小品』としました。子供たちは「物語」、「共感」、「喪失」、「服従」、「失

望」、そして「社会への怒り」といった言葉の意味を、どのように学んでいくのでしょうか。そして大人である私たちは、舞台上で学んでいく子供たちを見て、どのように反応するのでしょうか。

——あなたは非常に精度の高い、ときに完璧主義とも言われる作品で有名ですが、子供たちはうまく対応できたのでしょうか。どこまで子供たちを特訓する必要があったのでしょうか。

ペルイマンの自伝にもありますが、二つの対照的な演出法があります。一つは、最初に状況設定を正しく伝え、あとは俳優の自由に任せる方法。もう一つは逆のやり方ですが、初演を迎える直前までインプロで創作を続け、リハーサルの最終週にすべてを固める方法です。私は最初に枠組みを与え、あとは俳優に任せる方法を好みます。本作ではどちらの方法も試しましたが、子供には上手くいきませんでした。しかし結果から考えると、創作プロセスがどれほど順調でも、訓練やトレーナーの存在は常に可視化されているわけです。私は子供たちとつくられた現実的かつ具体性のある主題を持った作品で、彼らに枠組みを与える演出家が存在しないものを観たことはありません。しかし、だからこそ、主題と形式の観点から、さらにこの関係は面白くなるのです。

——どうということでしょうか。

大人向けの「子供の演劇」は、美的にも隠喩としても、人間関係における小児性愛と対応します。それは相互に責任を持つ恋愛関係ではなく、一方的な力の関係であり、弱い立場にある子供は、その関係に耐えなければならない。言い換えるならば、大人向けの「子供の演劇」において、メディア批評を求めるポストモダニズム的な傾向は、本来の対象へ戻ります。つまりメディア批評が、現実批評へと回帰するのです。子供たちとクリエーションを行う場合、私たちは「人物像」、「リアリズム」、「幻想」、そして「力の関係」などの実存的意味を問う必要があるのです。こういったプロセスをこの作品でもお見せしようとした結果、それぞれの「小品」はますます複雑で難解さを増しま

した。ロールプレイ、すなわち役割を演じることは、演出という名の暴力性を問う重要なものです（あのシンディ・シャーマンも、舞台上でパトリス・ルムンバやデュトルーの父親を演じられるのかと問うでしょう）。自然主義的な見せかけや模倣への執念といったものを通じて、私たちは次第に上演芸術（パフォーマンス・アート）、およびその実践における「変化」、「服従」、「反発」に関するメタ的研究へと至るのです。

——つまり本作は、単にマルク・デュトルー氏に関わることを扱うだけでも、腐敗した世界にどう子供たちと共に向き合っていくのかを問うだけでもない、演劇の本質的な意味を思考する作品でもあると。

IIPMは、演劇や映像作品を製作し続けて15年になります。ミニマルなパフォーマンス、政治的アクション、そしてアイロニカルな出し物まで、ありとあらゆる形式の作品をつくってきました。ラジオ劇、ビデオ・クリップ、映画、本の出版、会議形式の作品もあります。そして今年（2017）の春、私たちは国際演劇協会（ITI）から「世界演劇賞」をいただきました。長年の業績を認める賞のようです。しかし、ふと思うんです。次は何をしよう？ 舞台作品、映像作品、書籍……また50本ほど製作するのか？ つまり、私たちにとって、本質的な問題に関わるプロジェクトを行うべきタイミングが来たのです。舞台上で「誰か」になることの意味とは？ 「真似る」、「共感する」、「関連づける」ことの意味とは？ 人から見られる状態にどう対処するのか？ 何かを説明すること、実際にそれを行うことはどう違うのか？ 実を言うと、演劇の本質を問うことになったのは、よくよく考えて選んだことでもありません。というのも、大人の俳優には当然でも、子供には道徳的に難しかったり、技術的に不可能なことがあるからです。かの有名なスタニスラフスキーの俳優術は、今でも強く信奉されている伝説的な演技論ですが、あんな偏屈な芸当を使わずとも舞台作品は成立するのです。といった考えにも、結局は、かなりゾッとしますがね。

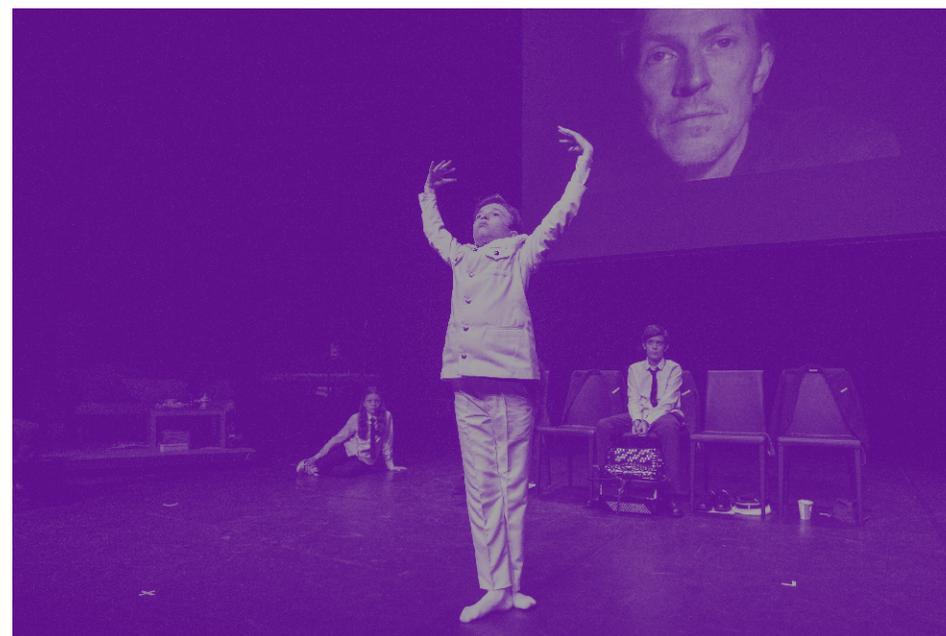
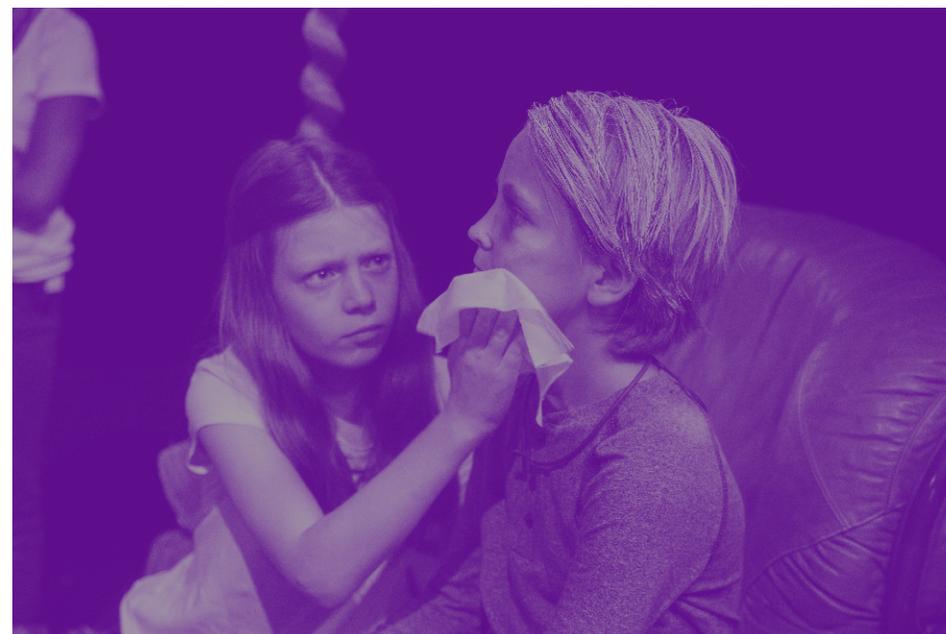


Photo: Phile Deprez

Concept, Text & Direction: Milo Rau

Text & Performance: Aimone De Zordo, Fons Dumont,
Arno John Keys, Blanche Ghysaert,
Lucia Redondo, Peter Seynaeve,
Pepijn Siddiki, Eva Luna Van Hijfte

Performance Film:

Sara De Bosschere, Pieter-Jan De Wyngaert, Johan Leysen,
Peter Seynaeve, Jan Steen, Ans Van den Eede,
Hendrik Van Doorn, Annabelle Van Nieuwenhuysse

Dramaturgy: Stefan Bläske

Direction Assistant & Performance Coach: Peter Seynaeve

Research: Mirjam Knapp, Dries Douibi

Set & Costume Design: Anton Lukas

Video & Sound Design: Sam Verhaert

Production Assistant: Ted Oonk

Tour Management & Child Care: Valentine Galeyn

Realisation Scenography: Ian Kesteleyan

Technical: Bram Geldhof, Jonas Castelijns

Production: CAMPO & IIPM

Co-producer: Kunstenfestivaldesarts Brussels 2016,
Münchner Kammerspiele, La Bâtie – Festival de Genève,
Kaserne Basel, Gessnerallee Zürich,
Singapore International Festival of Arts (SIFA),
SICK! Festival UK,
Sophiensaele Berlin & Le phénix scène nationale
Valenciennes pôle européen de création

Executive Production: CAMPO

Technical & Stage Manager: So Ozaki

Interpretation: Nobuko Aiso (Art Translators Collective)

Subtitle Translation: Tomoyuki Arai

Video Documentation: Daisuke Yamashiro

Photography: Masahiro Hasunuma

Curator: Chiaki Soma (Aichi Triennale 2019)

Production Manager: Sayuri Fujii (Aichi Triennale 2019)

Production Coordinator: Tsubasa Shimizu (Aichi Triennale 2019)

Production Assistant: Asami Hori

Presented by Aichi Triennale Organizing Committee

Co-Presented by Aichi Prefectural Art Theater

Supported by Goethe-Institut, Pro Helvetia Swiss Arts Council

コンセプト・テキスト・演出: ミロ・ラウ

テキスト・出演:

アイモン・デ・ゾルド、フォンス・ディモン、アルノ・ジョン・キーズ、
ブランシュ・ヘイサート、ルシア・レドンド、ペーテル・セイナーフ、
ペペイン・シディキ、エヴァ・ルナ・ファン・ハイフト

上演映像:

サラ・デ・ボッシュェラ、ピーテルヤン・デ・ヴィンハート、ヨハン・レイセン、
ペーテル・セイナーフ、ヤン・ステイン、アンス・ファン・デン・エイデ、
ヘンドリック・ファン・ドーン、アナベラ・ファン・ニューハイス

ドラマトウルク: シュテファン・ブレスク

演出助手・演技指導: ペーテル・セイナーフ

リサーチ: ミリヤム・クナップ、ドゥリス・ドゥイビ

美術・衣装デザイン: アントン・ルカス

映像・音響デザイン: サム・ファハート

制作アシスタント: テッド・オオンク

制作: ヴァレンティン・ハルイン

美術図面作成: イアン・ケステレイン

技術スタッフ: プラム・ヘルドオフ、ヨナス・カステレンス

製作: CAMPO & IIPM

共同製作: クンステンフェスティバルデザールブリュッセル 2016、

ミュンヘン・カンマーシュピール、ラ・パティ・フェスティバル、

カゼルネ・バーゼル、ゲスナー・アレー、シンガポール・アーツ・フェスティバル (SIFA)、

SICK! フェスティバル、ゾフィー・エンゼーレ、

ル・フェニクス・セーヌ・ナショナル・ヴァランシエンヌ

製作統括: CAMPO

技術・舞台監督: 尾崎聡

通訳: 相磯展子 (Art Translators Collective)

字幕翻訳: 新井知行

記録映像: 山城大督

記録写真: 蓮沼昌宏

キュレーター: 相馬千秋 (あいちトリエンナーレ2019)

制作統括: 藤井さゆり (あいちトリエンナーレ2019)

制作: 清水翼 (あいちトリエンナーレ2019)

制作アシスタント: 堀朝美

主催 あいちトリエンナーレ実行委員会

共催 愛知県芸術劇場

助成 ゲーテ・インスティトゥート、プロヘルヴェティア財団



GOETHE
INSTITUT

swiss arts council

prohelvetia

「あいちトリエンナーレ2019」ハフォーミングアーツ AICHI TRIENNALE 2019 / Performing Arts

キュレーター Curator

相馬千秋 SOMA Chiaki

アシスタントキュレーター Assistant Curator

藤井さゆり FUJII Sayuri

コーディネーター Coordinator

清水翼、村松里実 SHIMIZU Tsubasa, MURAMATSU Satomi

テクニカル・ディレクター Technical Director

尾崎聡 OZAKI So

票券 Ticket Administration

山崎佳奈子 YAMASAKI Kanako

翻訳 Translation

Art Translators Collective

(相磯展子、ベン・ケガン、リアン・キャンライト)

Art Translators Collective

(AISO Nobuko, Ben CAGAN, Lillian CANRIGHT)

編集・執筆 Editor/Writer

鈴木理映子 SUZUKI Rieko

編集: 鈴木理映子

デザイン: コバヤシタケシ (SURFACE)

印刷・製本: 藤原印刷

あいちトリエンナーレ2019 情の時代 2019年8月1日 [木] – 10月14日 [月・祝]

主な会場: 愛知芸術文化センター、名古屋市美術館、名古屋市内のまちなか (四間道・円頓寺)

豊田市 (豊田市美術館及び豊田市駅周辺)

芸術監督: 津田大介 (ジャーナリスト/メディア・アクティビスト)

主 催: あいちトリエンナーレ実行委員会

助 成: 損保ジャパン日本興亜「SOMPO アート・ファンド」(企業メセナ協議会 2021 Arts Fund)

公益社団法人企業メセナ協議会 2021 芸術・文化による社会創造ファンド

一般財団法人地域創造

AICHI TRIENNALE 2019: Taming Y/Our Passion

August 1 (Thursday) to October 14 (Monday, public holiday), 2019

Main Venues: Aichi Arts Center, Nagoya City Art Museum, Nagoya City (Shikemichi and Endoji)

Toyota City (Toyota Municipal Museum of Art and venues in the vicinity of Toyotashi station)

Artistic Director: TSUDA Daisuke (Journalist / Media Activist)

Organizer: Aichi Triennale Organizing Committee

Supported by Sompo Japan Nipponkoa Insurance Inc. [SOMPO ART FUND]

(Association for Corporate Support of the Arts, Japan; 2021 Fund for Creation

of Society by the Arts and Culture), Association for Corporate Support of the

Arts, Japan; 2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture, Japan

Foundation for Regional Art-Activities

